

令和7年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



中学校の部 最優秀賞

絵本がつくる海の向こうへの架け橋

福島大学附属中学校

3年 横山 和奏

「ごみの山の中から本を漁り、読む。」

これを聞いたとき、私は信じられない言葉に耳を疑った。私がこれを聞いたのは、去年の冬休みに家族旅行の中でタイのスラム街に行ったときである。私はそれまで本を読めるのが当たり前だと思っていた。幸いなことに、日本人は生まれたときから本を読める家庭がほとんどで、多くの幼稚園や保育園では、子どもの言語能力の発達のために本の読み聞かせが行われる。しかし、世界各国の貧困地域ではそうはいかないことを知った。

私が去年訪れたタイの首都バンコクは、経済も発展していてショッピングモールやブランドの店がたくさんあり、日本とほとんど変わらないような雰囲気だった。しかし、そこからわずか数分の場所には都市部の雰囲気と対称的なスラム街が広がっていた。

そのスラム街はクロントイスラムと呼ばれるバンコク最大のスラム地域で、密集した住宅地には約10万人もの人々が生活している。そこには世界各地のNGOの事務所などがたくさんあり、その中には、スラム街の子どもたちが学ぶ環境として学校や図書館が整備されていた。私は、両親と共にスラム街の中のシーカーアジア財団という教育支援を行う団体の事務所に訪問し、現地で40年以上教育支援に携わってきた方の話を伺った。そこで聞いた言葉が、冒頭の言葉だった。

私は日本に帰ってから、実際に東南アジアを中心とした貧困地域における教育の現状を調べてみようと思った。

はじめに私が着目したのは、世界各国の貧困地域における15歳以上の成人識字率である。ユニセフやユネスコ、シャンティ国際ボランティア会など、日本のNGO団体が公表している統計によると、さまざまな統計で世界各国の成人識字率が紹介されていた。ユネスコの2020年の識字率データ「UNESCO Global Education Monitoring Report」によると、カンボジアは81%、ミャンマーは76%、ネパールは68%、アフガニスタンは43%という報告があり、これらの国々を比較してみると、カンボジアの81%という数値は他の地域と比べて高いように思えるが、これは約5人に1人は文字が読めないということであり、35人のクラスでいうと7人に相当するということに驚きを隠せなかった。最新の調査ではカンボジアの成人識字率は90%を超えているというデータもあり、支援の成果が表れているということがわかった。しかし、それでも10人に1人は字が読めないのだ。

次に私は、インターネットの動画などを通じてそれぞれの地域の現状や特徴を調査してみた。カンボジアでは、1970年の内戦によって教育がほぼ壊滅的な状態になってしまった。識字率が低下したことにより起こる事故も数多くある。例えば、字が読めない男性が外を歩いているとき、地雷原の看板を読むことができずに地雷原に足を踏み入れようとして、

偶然その場にいたボランティアのスタッフに「そこは地雷原だ！」と教えてもらい一命を取り留めたという事例がある。私がその話を聞いたときは、まさに「人は命を守るために学ぶのだ」と感じた。

アフガニスタンでは、タリバン政権の方針によって小学校卒業以降の女子には公的な教育が認められていない。しかし、国際 NGO などによって運営されている図書館では、ボランティアのスタッフから無料で英語や数学などの教育が受けられる。私が動画の中で見た少女は、「図書館が唯一の楽しみだ」と語っていた。少女の言葉を聞いて私は、図書館や教育がいかに大切なのかを改めて感じた。

ミャンマーでは、軍事政権による内戦によって国を追われ、タイの国境付近にたくさんの人が難民キャンプでの生活を強いられている。難民キャンプの学校の授業風景の動画では、先生たちが行う読み聞かせを、子供たちが目を輝かせて聞いていた。その中で、本の内容を必死に別の紙に写す少年の姿が映っていた。その少年の母親は字が読めず、本も自分では読めないため、少年が学校で聞いた読み聞かせの内容を、家に帰って母親に読み聞かせしてあげるのだという。私は、母親が字を読めないということはもちろん、日本とは反対に子供が母親に読み聞かせをしているという事実にとっても衝撃を受けた。

これらの国の現状を知り、私は、日本ではごく当たり前である「本」や「図書館」が、人々の心の支えであり、希望になっているということを改めて認識した。

各地域の現状を調べた後、私は自分にできることはないかと考えた。ちょうどそのとき、父親からシャンティ国際ボランティア会主催の「絵本を届ける運動」を紹介された。「絵本を届ける運動」とは、支援を必要としている現地からの要望を受けて、日本語の新品の絵本に現地の言語の翻訳シールを貼り、現地の図書館や学校に寄贈する活動である。毎年約18000冊の本が海を越えて現地に届けられている。

早速私は、「ねずみくんおおきくなったらなにになる？」というラオスに送られる予定の本を選び、ボランティアに参加した。シールを貼る作業自体は、本の内容や個人差もあるが30分程度で終わるものだった。

シャンティ国際ボランティア会の2024年の報告書によると、現地に届けられた合計冊数は18631冊であり、私の手元1冊もそのうちの1冊として現地に送られるのだと思うと、自分も国際貢献していることを実感できた。本の最後のページには、日本語とラオス語で自分の名前を書く。慣れない文字を書きながら、動画で見たような現地の図書館にこの本が届くと思うと、とても嬉しく思えた。

私は実際にタイのスラム街や世界各地の教育支援の現場の動画などを見て、どんなに厳しい環境でも人は学ぶことができるのだと感心した。そして、海外に行くことができなくても、日本で「絵本を届ける運動」のようなボランティア活動に参加して、少しの時間を使うだけでも現地の教育を支援できるということを学ぶことができた。また、このような時代だからこそ、インターネットなどを通じて様々な国や地域に興味を持ち、現地の状況を知ることにもできる。これからは遠い国の出来事ではなく、自分と近い世代の人たちが直面している問題として、国際支援や国際協力について考えていきたい。

参考文献

- 公益財団法人 日本ユニセフ協会
<https://www.unicef.or.jp/>
- 公益財団法人 シャンティ国際ボランティア会
<https://sva.or.jp/>
- YouTube 動画「アフガニスタン・危機下の子ども図書館」（アフガニスタン）
<https://www.youtube.com/watch?v=7zeSYf60rLU>
- YouTube 動画「本の力を、生きる力に。アジアの子どもたちに届けられた27万冊の本」（ミャンマー難民キャンプ）
<https://youtu.be/5geKbXvmeMY>
- YouTube 動画「絵本を届ける運動」（カンボジア）
https://youtu.be/Sd_w3TJp-dI?si=jDHdIBOTzZO7QgaF
- 公益財団法人 日本ユネスコ協会「コロナ禍と寺子屋」（2020年時点の識字率）
https://www.unesco.or.jp/pdf/report/2020_report.pdf
- 世界子供白書 2023（ユニセフ）